

子だったろう（『報告書』11巻10章）。そこには両者の適応（アコモダチオ）の可能性に宣教の成否を賭ける現地派遣宣教師の政治的立場もあった。この融和的儒教道徳観はやがて啓蒙主義者に引き継がれる。だがヴォルテールは、『聖書』と同様孔子もまた「人に為されんと思うことは、汝もまた人にもその如くせよ」と語った、と《誤解》している。平川祐弘氏も説くとおり（『マテオ・リッチ伝』）キリスト教の積極的な愛の教えと孔子の消極的な道徳律とには「非常な差」がある。

下世話な比喻でいえば、一方は世界の警察をもって任じ、紛争とあれば湾岸にまで派兵したアメリカ合衆国の「火消し根性」（fireman's complex（箕輪成男）であり、他方は「外圧」を前にひたすら内部の「もみ消し」と引責自殺が横行する「日本的危機管理」という対比に至りつこうか。だが典礼論争における康熙帝も、キリスト教の神を儒教の天へと還元した。「他者」を容認する寛容さは、「他者」を自らの普遍性の証へ用立てる論法と表裏一体だ。規則を共有しない複数性の許容と、その地盤となる共通の土台設定との謎ごっこ。この「真理」の政治学にはいかなる倫理が要請されるのだろうか。

連載②
複数性をまえにした両立性と反立性の倫理学に向けて

普遍の政治学

複数性をまえにした両立性と反立性の倫理学に向けて

稲賀繁美
Inaga Shigeni

三重大学・トランス文化学

岸田俊子といえは日本女性解放運動の先駆者といって語弊はあるまい。その「同胞姉妹に告ぐ」に次のような一節が見える。「己の欲せざるところは人に施すことなかれとは赤鼻〔もろこし〕の聖人の教えなり己の欲することを人に施せとは西洋聖教の旨にして仁恕の心をもて人に交はるを教となすことは東西ともに符節を合わせたるが如」（『自由の燈』第28号、1884年6月18日）。いうまでもなく、前者は四書に、後者は『新約聖書』マタイ伝7章12節、ルカ伝6章31節に由来する。

疑問その1。当時こうした比較は広く人口に膾炙していたのか。その2。俊子やその夫中島信行らも巻き込んだ当時の青年たちの基督教への熱病のような憧れと儒教道徳との関係は。その3。「婦道」を否定した俊子の「愛隣」の考えは、東西道徳観のいかなる融合のうえに形成されたものなのか。その回答は『花の妹』の西川祐子氏や『近代中国と「恋愛」の発見』の張競氏といった専門家にお任せしよう。だが、そもそもこの比較、「仁恕の心」が「東西ともに符節を合わせた」証拠と認められるようなものか。

このふたつの章句にキリスト教と儒教との類似性を最初にみいだしたひとり、おそらくマテオ・リッ